漢詩神奈川

第　34　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-3045

発行人　香取和之
編集人　久川憲四郎

全日本漢詩大会を成功させよう

神奈川県漢詩連盟会長　香取 和之

香取和之会長

皆様、新年明けましておめでとうございます。お正月はいかがお過ごしでしたか。

新年を詠った漢詩でよく知られているものに、宋代・真山民の五言律詩「新春」があります。特にその中の名句、

「人心新歳月　春意旧乾坤」

（新しい歳とともに人の心はあらたまり、春の気配は昔のままの天地に満ちている）

に感じ入る人は多いと思います。このように新たな気持ちで、一年を過ごしたいものです。

ところで、本年の神漢連の最大行事といえば、皆様ご承知の通り、「令和六年度全日本漢詩大会」が神奈川県横浜市で十月二十六日（土）に開催されることです。

昨年九月には「大会開催の件」で皆様にお知らせしましたが、その後、大会会場の確保、神奈川県を始めとする各種団体による大会後援や表彰状授与の申請、応募要項の策定、オンライン応募方式の検討、大会詩集の編集準備、大会当日の準備、交流懇親会と吟行会の計画と、関係者による多大な尽力のもと準備に万全を期しております。

神漢連では、毎年多数の会員が種々の全国漢詩大会に応募し、本紙の十三～十五頁に記載されている通り多くの方々が入賞・入選の栄誉に浴していますが、その裏には各大会開催に向けての主催者の多大な努力があります。今回は神漢連がその役割を果たす時です。

漢詩大会の「応募要項」は本会報に同封されています。

一．詩題は「『港にかかわるもの』としますが、自由題も可」です。

二．応募期間は三月一日（金）～五月三十一日（金）です。

是非多くの方々が応募し、更に地元での大会に参加し、又その夜の中華街での交流懇親会や翌日の三溪園での吟行会への参加を通して、全国の漢詩愛好家と交流することを願っています。まさしく、

「朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや」（論語）です。

また大会当日には受付や表彰・吟詠などを通して、多くの方々の協力が必要となりますので、宜しく願います。

尚、神漢連の活動としては、本年も四・五月に第十八期の「漢詩入門講座」を開き、新たな会員を迎え入れる予定です。また、各漢詩サークルでの作詩・批正、各鑑賞会・講演会での漢詩鑑賞、オンラインでの吟行、漢詩研修、更に神辞会などが予定されています。

一方では会員及び講師の高齢化により、神漢連の運営が厳しくなっており、例えば三七八（みなわ）会のように三つのサークルが合体したものも現れています。また、サークルでの漢詩研修のレベルアップ、若年次のサークル会員による主体的活動、ＩＴ環境を駆使した運営効率化、若年層への会員勧誘と、課題は尽きませんが着実に進めて行きたいと思います。

このような課題があるものの、前述の活動を通して、神漢連のモットーである「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を実践し、本年もお互い有意義な人生を送りたいものです。

全日本漢詩大会神奈川大会に応募しよう！

神奈川大会について

事務局長　久川憲四郎

全日本漢詩大会神奈川大会の概要は、以下のとおりですので、神漢連会員の皆さんは、同封の「応募要項」をご覧の上、奮って応募いただきますようお願いいたします。

漢詩大会開催日時と場所

令和六年十月二十六日（土）
午後一時三十分～四時三十分
於：はまぎんホール　ヴィアマーレ
（ＪＲ桜木町駅前）

漢詩応募受付

令和六年三月一日㈮～五月三十一日㈮
当日消印有効

応募規定

未発表の七言絶句一首（二首以上失格）
題「港にかかわるもの」、自由題も可
応募料は、一人につき二千円
但し、U23、U18は無料

応募方法と応募先

次のいずれかによるものとする。
郵送での応募
全日本漢詩大会神奈川大会事務局
〒230-0078　横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301　久川憲四郎
メールでの応募
神漢連ＨＰの「令和六年度全日本漢詩大会神奈川大会特設ＨＰ」から応募

審査

選者による審査を行い、入賞・入選作を決定し、七月末までに該当者に連絡する

表彰・賞

（特別賞）文部科学大臣賞、横浜市長賞ほか多数
（秀作）、（入選）、（U23奨励賞）、（U18奨励賞）

発表と漢詩大会

前記「漢詩大会開催日時と場所」で
表彰式：入賞・入選作発表、表彰、選評
記念講演：全日本漢詩連盟
鷲野正明会長
優秀作品吟詠、アトラクション等を実施

交流懇親会

同日午後五時三十分～七時三十分
横浜中華街

吟行会

翌日十月二十七日㈯
午前十時三十分～午後二時三十分
「三溪園」（国指定名勝）
詳細は同封の「吟行会案内」参照

漢詩大会がもたらしてくれたもの

三七八会　高橋純子

湯島聖堂に通い始めて四年目の頃「これに出してごらん。」と、机に漢詩大会の要項をポンと置いた方がいた。この頃私の作詩数は一年に課題の十首のみ。大会に出品できたら作詩数を増やすことができると思い挑戦することにした。

しかし、題を自分で考えたこともなく頭を抱えてしまった。締切日は迫るばかり。とにかく審査だけでもしていただけるよう、ルール上破綻の無い詩を作ることを目標とした。

破綻の無い詩を作る。当たり前のことだが、できていなかったのだ。毎月の宿題では、不安な箇所や平仄のミスも先生が直して下さるだろうという甘えた気持ちがあったことに初めて気づく。これは、その後の作詩に臨む姿勢を大きく変えた出来事だった。とはいえ、今でも間違いがあるのは情けないことだが。

大会では、全国の漢詩のお仲間との出会いがあり、刺激をいただけることが非常に嬉しいことである。

また、日々の何気ない風景を意識して見るアンテナが立った。小さな変化をキャッチする作業は好奇心を満たし、日常を豊かにしてくれる。

思いがけないきっかけで大会に出品したことが、漢詩の世界を広げてくれた。そして、僅かだが私を成長させてくれたことは間違いないようである。

全日本漢詩大会／国民文化祭 神奈川県漢詩連盟会員の入賞・入選者一覧

下表に平成二十四年度以降の入賞・入選者一覧を示す。表を見て分かるように、神漢連の諸先輩は優れた詩を作ることに努力され、立派な成績を残されてきました。

今回、地元神奈川県で全日本漢詩大会が催されることになりました。是非多くの方々が力作を投稿されることを期待しています。

神漢連では過去に石川省吾先生と城田六郎先生が文部科学大臣賞を受賞されており、その詩を記します。

平成二十四年度　全日本漢詩大会

文部科学大臣賞　石川省吾

黄山初陽　黄山初陽

拂曉冒寒孤倚筇　払暁寒を冒して 孤り筇に倚る
東天漸白泛奇峯　東天漸く白んで 奇峯泛かぶ
忽穿雲海一條箭　忽ち雲海を穿つ 一條の箭
先射山巔蟠屈松　先ず射る山巔 蟠屈の松

令和二年度　国民文化祭

文部科学大臣賞　城田六郎

酒匂川畔村酒　酒匂川（さかわがわ）の畔の村酒
嶽麓發源清冽川　岳麓（がくろく）に源（みなもと）を発す清冽の川
麴塵粳稻僻村傳　麴塵（きくじんこうとう）粳稲僻村に伝う
綠醅初熟醍醐味　緑醅（りょくばい）初めて熟し醍醐（だいご）の味
一斗十千何惜錢　一斗十千何ぞ銭を惜しまんや

全日本漢詩大会／国民文化祭　神奈川県漢詩連盟会員入賞・入選一覧

開催年度	大会	開催都道府県	神奈川県漢詩連盟会員				神奈川県応募者数
			特別賞	秀作	佳作	入選	
平成24年度	全日本漢詩大会	全十（東京）	石川省吾（文部科学大臣賞） 中島龍一	城田六郎	古田光子	小嶋明紀子、小林榮一、 萬谷美次	39
平成25年度	国民文化祭	山梨	上田尤子	石井彦德、 石川省吾、 瀧川智志		飯沼一之、桜庭慎吾、 住田笛雄、高津有二、 中島龍一、古田光子、 室橋幸子	
平成26年度	全日本漢詩大会	宮城	中島龍一、高津有二、 飯沼一之、岡田泰男			水城まゆみ	
平成27年度	全日本漢詩大会	福岡	城田六郎、中島龍一		瀧川智志	香取和之、水城まゆみ	
平成28年度	全日本漢詩大会	京都	秋吉邦雄		大森冽子	大谷明史、水城まゆみ、 高津有二、丹下和幸	
平成29年度	全日本漢詩大会	愛知	川上修己		池上一利	岡田泰男、香取和之、 齋藤　護、城田六郎、 杉森千枝美	52
平成30年度	全日本漢詩大会	全十五（東京）	俣野長生	生駒裕子		板本健作	46
平成31年度 ／令和元年	全日本漢詩大会	香川	川上修己	香取和之			49
令和2年度	国民文化祭	宮崎	城田六郎（文部科学大臣賞） 住田笛雄、岡田泰男	大石加代子		上田尤子、高津有二、 高橋純子、横山真吾	43
令和3年度	全日本漢詩大会	石川	石川俊之	高橋純子		大石加代子、横溝喜久男	37
令和4年度	全日本漢詩大会	全二十（東京）	高橋純子、五嶋美代子、 廣田雅人	大野若人		松本祐輔、水城まゆみ、 横溝喜久男	36
令和5年度	国民文化祭	石川	三村公二、高橋純子	廣田雅人		岡嶋宣昭、小嶋明紀子、 五嶋美代子、杉森千枝美、 三浦哲郎	42

神漢連元事務局長　桜庭慎吾氏の逝去を悼み、関係の皆さまから追悼文が寄せられました。

故桜庭慎吾先生を偲ぶ

香取和之

桜庭先生には公私共に大変お世話になり、思い出は尽きません。先生は神漢連の第二代事務局長として県連の発展に努められ、その後も後輩の指導に情熱を傾けられました。

漢詩を熱心にやられる方は多いですが、先生ほど真剣に取り組まれた方は稀です。先生にとって、漢詩は「人の生きざま」であり、「人間の本性に根差し、それを明らかにするもの」と捉えておられました。

従って指導も情熱的で、時には激高することもあり、非常に厳しいものがありましたが、その奥に優しさを常に秘められておられました。筆まめで常に多くの会員に励ましの葉書を書かれ、勇気づけられた方は多かったと思います。

先生の辞世の詩ともいうべきものは、亡くなられた直後の學士會会報に掲載された「追稱蘇軾」です。「東坡開墾躬耕客、嶺海親交土着民、貶謫數遭無挫折、貫通獨立不羈人」。先生は近年、蘇軾を特に敬愛されており、本詩はその蘇軾を詠ったものですが、先生ご自身のことだったと思えてなりません。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。先生有難うございました。

在洲桜庭慎吾先生への感謝と追悼

漢詩鑑賞会A　元事務局　瀧川智志

平成二十年、桜庭慎吾先生から長文のお便りを受け取りました。神漢連の行事として、玉井幸久先生を講師に招き、漢詩鑑賞会Aを始めたい旨、その世話人を依頼する趣意が厳粛な筆致で綴られていました。先生は筆まめでした。

第三期サークル好文会の講師としてご指導いただいている縁もあり、両先生のご指導のもと、月一回の唐詩鑑賞を開催することになりました。唐詩鑑賞が終了した翌令和二年から、引き続き桜庭先生の宋詩鑑賞がスタートしました。直後、新型コロナウイルスのため一時中断しましたがＺＯＯＭを用いた講義形式で再開しました。

宋代の名詩の数々を懇切丁寧に解説していただきましたが、不運にも体調を崩され、やがては、闘病しながら気力の講義となりました。先生は杜甫の大ファンであり、また蘇軾には特に深い思い入れがあり、蘇軾の生き様に見習いたいとの思いを込めた講義は情熱的でしたが、残念ながら蘇軾の最終詩直前に逝去されました。

先生は私たち一人一人に親しく声をかけ、温かく接してくださいました。その懇切なご指導に感謝の意を表し、会員一同とともに、桜庭慎吾先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

桜庭慎吾先生と以文会

以文会　柴田　洋

この度のご永眠に対し、謹んでお悔やみを申し上げます。先生には十一年間、身を以ってご指導賜りました。

会名「以文会」の謂われは論語からと、この時既に「漢詩とは何ぞや」と、熱の入ったご説明をされたお顔を鮮明に覚えています。当初我々は詩語の理解も未熟の中で、七言絶句に傾注することに懸命でした。然し先生は、更に会の方向性を示唆するが如く詩集をつくるべしとご指示が出されました。

これは青天の霹靂でしたが、以文会各位の努力により、会発足三年目に完成させたのです。詩集を作る意味は、漢詩を成すには絶対に必要であると。今思えば、スパルタ教育的ではなかったかと思う位です。当時は詩集はまだ少ない時の発刊でした。先生は添削しないと言われていましたが、それとなく目を零してくれました。感謝です。

振り返ってみると、厳しい指導があったからこそ、今の以文会が存在すると言っても過言ではありません。有難うございました。

終わりに短歌を一首添えます。

（柩に入れさせていただきました）

〝この世にし　杜甫を極めて　途なかば
黄泉の国なる　広きを逝かむ〟

合掌

連盟の行事

オンライン吟行会

「横浜夏景」（八月二十四日開催！）

昨夏は酷暑に次ぐ酷暑でしたが、参加者はクーラーのきいた涼しい自宅から、二十六名がＺＯＯＭ画面の中に集まりました。

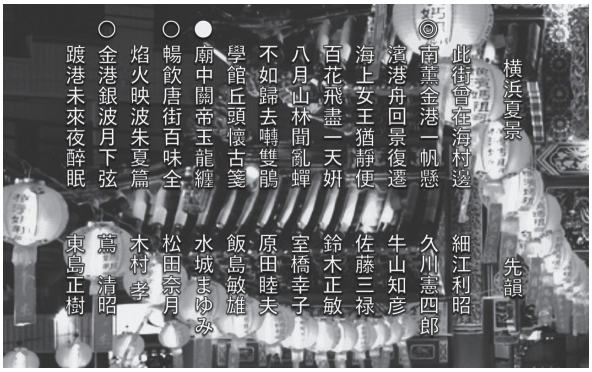
事前の投句はメールの受返信だけで完結できて、日頃馴染みの二四不同・二六対等の作詩ルールに従った一句を二日間検討できるので、初級者にも敷居は低くなっています。

提出された一句（白文と書下し）は韻目グループ毎に、作者名を伏せた状態で参加者による人気句投票が行われますが、選者による優句・秀句選定との関係も興味深いものです。（いずれも賞品がもらえます）

なお、最近のオンライン吟行会で一番時間を費やすのは、連句の一句一句について、作者がその苦労を語り、選者（今回は香取・水城両先生）が丁寧な講評を行うやり取りです。これによってオンライン吟行会は、漢詩の学びの場・サークルを越えた会員交流の場に成長してきました。後掲のとおりここから生まれた一句が、七言一首になって漱石漢詩大会最優秀賞に選出されたことはご同慶の至りであり、今後の活動の大きな励みです。

次回は、二月二十六日（月）に開催となりますが、参加の輪を広げていきたいものです。初参加も大歓迎ですから、多くの会員の申込をお待ちしています。

（牛山知彦）



オンライン吟行会に参加して

既望会　内山早奈江

橋燈燦爛去来舟

オンライン吟行会へ参加させて頂くのは今回で2回目となります。句を作る前に思った事ですが、今回詩題は「横浜夏景」で普段目にしている風景がテーマでしたので前回のテーマより作りやすいと思いました。

韻字は舟があったので、横浜の港の風景が頭に浮かびました。港の見える丘公園や山下公園からの横浜ベイブリッジの夜景は横浜を象徴している美しい風景だと思います。普段目にしていると少し感動は薄くなってしまいますが、もし初めて横浜の夜景を見た人がどんな風に感動するだろうかと想像して今回の句を作りました。

今回参加した方々の投票で人気句に選んで頂いたのは、大勢の方が持っている横浜の景色を詠んだからだろうかと思います。

同じ横浜夏景というテーマでも、それぞれの参加者の方がいろいろな場所の景色を詠んでいて、個性として表れるので大勢で会をするのは楽しく、勉強になります。

本来は吟行会は同じ場所に出掛けて、それぞれ詩を詠むという会だと思いますが、実際に出掛けてなくてもＺＯＯＭで参加している方で同時に鑑賞できるのは楽しい体験でした。私もそうですが漢詩を作り始めて日が浅いと一詩の作成にもなかなか時間が掛かってしまい苦労するのですが、一句の作成だとそんなに難しくないと思いますので、まだ参加されていない方にも是非参加して頂いて、一緒に楽しみたいと思っております。

『神奈川県の旅する漢詩』
ー高芝麻子先生講演会ー

令和五年十一月一日（水）神奈川近代文学館に於いて、横浜国立大学准教授の高芝麻子先生による『神奈川県の旅する漢詩』の講演会が開催され、百四十名を超える来場者で大変盛会でした。神奈川に関する多くの詩の中から十一首を選んで講演されました。そのうち七絶の四首をここに紹介します。

【はじめに】

江戸時代の神奈川は、箱根の関所が江戸と江戸以外を繋ぐ位置として認識されていたと思います。唱歌「箱根八里」を見てみましょう。

作詞 鳥居忱　作曲 滝廉太郎

箱根の山は 天下の嶮 函谷関も ものならず
万丈の山 千仞の谷 前に聳え 後方に支ふ
雲は山を巡り 霧は谷を閉ざす
昼猶ほ闇き 杉の並木
羊腸の小徑は 苔滑らか
一夫関に当たるや 万夫も開くなし
天下に旅する 剛気の武士 大刀腰に 足駄がけ
八里の岩根 踏みならす
かくこそありしか 往時の武士

まず、八里とは約三十二km、箱根を越え小田原宿から三島宿までです。中国の難攻不落の関所である函谷関よりも箱根はすごいと始まります。羊腸などは日常生活ではあまり使わず漢文らしい表現です。そして、一人の兵士が関所を護っていれば万もの兵士が攻めてきても落ちないであろうと、箱根は江戸を防衛する要として信頼たるものだと自負を感じます。では、当時の旅人たちが残した詩を紹介してまいります。

高芝麻子先生

【1 箱根】

森春濤の「踰函嶺」です。彼は尾張藩の人で漢詩人として名を遂げました。

長槍大馬乱雲間　長槍 大馬 乱雲の間
知是何侯述職還　知る是れ何れの侯か述職して還る
淪落書生無気焔　淪落の書生 気焔無く
雨衫風笠度函関　雨衫 風笠 函関を度る

前半はすれ違った大名行列の様子で、立派な槍や馬のお大名様が江戸での勤めを終えられて戻るところであろうと詠んでいます。後半、我が身を振り返れば、落ちぶれた書生が雨に濡れ打ちひしがれて箱根を越えてゆく。江戸に向かう志はあるものの謙虚に自分を捉え、このクリアな対比を詠う。なかなか戦略的な手法です。

【2 江の島】

江の島は江戸時代から活気のある観光地でした。菅茶山の「絵島」を見ていきましょう。

山陽諸嶋列成隣　山陽の諸嶋 列びて隣を成し
佳境各堪誇北人　佳境 各の北人に誇るに堪う
一事唯難及斯地　一事 唯だ斯の地に及ぶに難きあり
芙蓉隔海露全身　芙蓉 海を隔てて 全身を露す

茶山は山陽の人で瀬戸内海を見て育ったと思うのです。その瀬戸内海の島々の風景は素晴らしいが、一つだけ江の島に勝てないことがある。それは、江の島を見ながら海の向こうに富士山が見えることだと言います。自分の故郷のお国自慢とみせかけながら江の島を褒めてくれていて神奈川県民としては嬉しくなるような詩です。

【3 杉田】

次に、今とは異なり江戸時代には梅花と海と山の自然豊かな観光地だった杉田を取り上

げます。大沼枕山の詩をご紹介します。

「壬寅孟春十有三日、拉子世遊杉田。時風雪大作、就農舎、看梅花。花未放。春寒殊甚、呵筆書」

一蓑衝雪向山陲　一蓑 雪を衝きて 山陲に向かひ
忍凍尋梅也是痴　凍を忍び梅を尋ぬるは也た是れ痴なり
縱得千林春似海　縱ひ千林春の海の似きを得るも
問君何及此游奇　君に問ふ何れか及ばん此の游の奇なるに

春の初めに杉田に来たが風雪激しく、農家の家に入れてもらい梅を見ようとしたがまだ咲いていなかった。寒くて筆に息をかけて書いたとあります。寒さに耐え梅を見に来たとは私も愚かしいことである。もし、花盛りの時にやってきて花が海のようだとして、どうだね君、今日の遊とどちらが面白いかねと、雪の中、咲いていない梅を見に来た自分を楽しんでいます。

【４ 横浜】

最後は幕末に開港した横浜の詩、成島柳北の「舟中雑十首」其八です。

亜剌羅山何処辺　亜剌羅山（あららつとさん）は 何れの処辺ならん
風濤淼漫碧涵天　風濤（ぴょうまん）淼漫として碧は天を涵す
艙間併載牛羊豕　艙間 併せて載す 牛羊豕（ぎゅうようし）
彷彿千秋諾亜船　彷彿たり 千秋 諾亜（のあ）の船

講演される高芝先生

柳北は江戸幕府に仕えていましたが、時代に素早く適応しヨーロッパへ飛び出して行きました。亜剌羅山はどこだと詠い、冷蔵庫の無い時代、船に乗せた牛羊豚の鳴き声がしてまるでノアの箱舟のようだと、旧約聖書のエピソードを用いて自分の状況に重ねています。柳北の覇気にあふれた勢いと洒落っ気がすべて詰まった作品です。

【おわりに】

箱根は日本国内のアクセスポイント、横浜は明治以降世界につながる窓口でした。そういう意味で神奈川は非常に面白い地域だと思います。また、観光地も江の島や鎌倉など変わらぬものは変わらず続いている。こんな豊かで美しい神奈川を私たちも漢詩に詠めたら楽しいですね。

この講演会では漢文文化が当時の貴重な文化資源をしっかりと残していることを実感しました。高芝先生は浮世絵と照らし合わせながらお話をして下さったので、より当時の様子が伝わりました。YouTubeでは浮世絵もご覧になることができます。是非ご覧ください。

記　高橋純子

熱心に聴く多数の来場者

サークル紹介

「三七八会」

代表　橋本孝一

「三七八会」は、旧「三水・七歩会」と旧「八起会」が合同して、今年九月に合同後初めての例会を開催したばかりのサークルです。

旧「三水・七歩会」も、旧「三水会」と旧「七歩会」の合同なので、計三つのサークルが一緒になったことになります。

「三七八会」は字を見た通り、旧各サークル名の漢数字を並べただけですが、実は読みに深い意味?が隠されているのです。

「ムリムリな読みだよ」とか、「駄洒落が過ぎるのでは?」とか、「実態とかけ離れているじゃないか」とかの意見も当然あったのですが、結局全員一致で笑って決めました。「みなわかい」と読みます。「八」は片カナの「ハ（わ）」に似ていますよね。その心は「皆若い」に通じ（させ）ます。

各旧サークルの会員が減少するなかで、合同するにあたっては、どのサークルと合同するのが良さそうか、隔月の例会開催日をどちらにあわせるか等々の問題がありましたが、何とかこぎつけることができました。

会員には、例会には出席できないけど詩稿を提出したり送ってもらったりする人もいます。また、出席するけど詩稿はほとんど提出せず、先生の詩稿批正を聞いたり、皆さんにお会いするのを楽しみにしている人もいます。（僕もその一人です。）

二回目の例会では十二人（女性五人、男性七人）の出席があり、和気藹藹とした雰囲気で楽しい例会でした。例会後の、都合のつく有志でのファミレスでする懇親会も欠かせません。

会員の漢詩作成レベル?は様々であり、また各々のこれまでの人生経験も色々、趣味も色々な人の集まりですが、それがまた二ヶ月毎に顔をあわせて話ができるというのが良い所ではないでしょうか。

三七八会の皆さん

自詠自吟で学び漢詩で遊ぶ活動へ

岳精会漢詩研究会代表　家吉 幸二

私たちは岳精流日本吟院という詩吟の団体に所属する仲間で、神漢連の会員となって漢詩を吟ずることから漢詩を作ることへ機会を得ることができ、文字通り連盟のモットーである「漢詩を学び、漢詩で遊ぶ」から十年が経ちました。

当初は、詩吟を勤しんでいる者にとっては自ら漢詩を作り短歌をそして俳句を詠み、自詠し自吟出来ることこそ吟詠を楽しむ者の醍醐味であるとの思いで研究会がスタートしました。最初は十七名のサークル員でした。ところが、高齢や健康問題、転居や残念ながら他界されたり更にコロナ禍の影響によって漸減し会員が現在七名となっています。

研究会の場所は川崎市川崎区「岳精流総本部事務所」において三村公二講師（現在全漢連事務局長）による熱血指導を受けています。

吟詠を学んでいることから、漢詩勉強に先立って宗家信条「真善美」を唱和し「岳精会会詩」の合吟を高らかに吟じて清々しい空気感の中でルーティンが進みます。

その後、講師に事前に批正して返送頂いた詩文に基づき各人の詩文内容の説明とディスカッション、講師の指導、勉強会の時間をみながらそれぞれ自吟するという勉強会約二時間半の設定となっております。

私たちが漢詩を学ぶ目標は、詩作のレベルアップと豊かな表現力であり、そのためには、

一、感性を磨くために日々努めているか
二、兼題に基づきデッサン出来ているか
三、豊かな詩の鑑賞をどれだけしているか
四、極力詩作し、批正・批評を得ているか

などが個々人の詩力向上の基本と言えます。

そして「漢詩で遊ぶ」という好きなフレーズを目玉としてオンラインを含めた吟行会、自詠自書の会、ＡＩ漢詩への挑戦、YouTubeチャンネル参加、漢詩グッズの製作などアイデアが豊富で多彩な活動に発展していくことを望みたい。

漢詩を学んで 人生を豊かに!!

十期会代表　高田宗治

十期会は平成二十八年（二〇一六）九月に第一回定例会を開催しましたが、早くも七年が過ぎて八年目に入りました。年六回（奇数月・第三木曜日）の開催ではありますが、これまで一度も休むことなく実施することができました。発足当初は会員十一名でスタートしましたが、八年目を迎えた今も尚九名の方が在籍しております。講師は初めの頃は二人体制でしたが、現在は一人で当初からご指導をいただいている高津有二先生であります。

■当会の講座内容を紹介します。

①当会の方針：詩稿の提出は一人一首を原則としているが、詩題については当初から一貫して自由題としている。（自由題、題詠の何れがよいかは議論の分かれるところ）

〈目的〉a、一人一首制とすることで、プレッシャーもなく、楽しく学ぶことができる。b、自由題には旅行や体験等の詩の題材が多く、無理なく詩作に取り組むことができる。

②詩の再工夫：提出詩稿と批正箇所を検討した上で批正通りに修正するか、或いは再工夫をした上で詩稿を再提出するかして、次の定例会で発表するようにしている。

〈目的〉今までは批正箇所を中心に議論をしてきたが、修正詩稿（定稿）を再提出することによって推敲の時間も増え、より完成度の高い詩作が期待できる。

③発表と纏め：定例会では当初の提出詩稿と修正詩稿（定稿）を併記して発表するようにしている。先生の総評をいただいた上で、全員の意見も聞くようにしている。

〈目的〉a、全員が各詩の問題点を共有することで、詩力向上に繋がることが期待できる。b、定例会終了後には、議論になった点や資料等を添えて「まとめ」を送付している。

上：十期会、下：逸語会

個性それぞれ漢詩づくり

逸語会代表　田内　隆

当サークルは、第十五期のサークルとして、令和三年（二〇二一年）七月に発足しました。名前の由来は十五期を「いちご」と読み、安らかに楽しむ「逸」を用いて「逸語会（いちごかい）」としました。メンバーは十一名（休会の一名含む）で、男性七名、女性四名です。年齢構成は、五十代から八十代までと比較的バランスがとれています。

ご指導は、水城まゆみ先生、高田宗治先生にお世話になっています。定例会は、奇数月の第一火曜日、十三時から十六時まで、かながわ県民センターの会議室で行っています。詩稿は、毎回、一人一首、または二首（題詠一首、またはこれに加えて自由題一首）。詩題は、当初は自由題でしたが、昨年の五月から、季節に合わせた「題詠」になり五月「春日郊行」七月「梅天閑詠」九月「水樓夏夜」十一月「中秋對月」の題で詩作しています。

さて、メンバーは、中国語や詩吟に造詣の深い者から、漢詩は高校の授業以来の者まで、幅広く、皆個性的で、詩の作風もバラエティに富んでいます。例えば、五月の題「春日郊行」では、「春菜を摘む」、「寺を訪ねる」等。七月の題「梅天閑詠」では、「梅酒を飲む」、「寺の紫陽花」、「海岸の散策」、「家のシャム猫」、「部屋での詩作」、「雨の中の美女」、「庭の石榴」、「庭の蝸牛」、等のテーマで詩が作られました。

会としては、詩の巧拙、出来不出来にとらわれず、メンバーそれぞれが自分の好みに合った詩を、生みの苦しみを味わいながら、楽しんで作ることが大事だと思っています。勿論これまでの、水城先生、高田先生の懇切丁寧なご指導のお陰で、メンバー全員、詩は確実に上手くなっています（!?）。これからも、メンバー同士の懇親を深めて、楽しくサークル活動を続けていければいい、と思っています。

会員の活動

第十七期「いななき会」発走

代表世話人　吉池　純

第十七期は、昨年九月五日に第一回例会を開催。サークル名を各自が持ち寄り、話し合いの結果「いななき会」に決定しました。未来に向かって棹立ちでいななく駿馬。

コロナはいまだ完全には収束していないものの、新生令和を象徴するサークル名であると全員が納得し、例会後の呑み会でも皆口々によかったよかったと杯を傾けあいました。

さて、宴も終わり、帰路の電車のなかで、「いななき会」を小さく唱えていたところ、ふと、「いななき」は「一七無き」に通ずるとの疑念が浮かびました。これでは早晩霧消する、まずいではないかと慌てたのですが、いやそうではなく、「無否」であれば否定の否定だから肯定だ、と考え直してみたりと、帰宅後も深更まで思いを巡らせました。

閑話休題。本会は九名の会員でスタート。

大学で石川先生の薫陶を受けた人、国語教師として生徒の指導に携わって来た人、中国で長年仕事を務めた人、書をよくする人等々、多士済々。単なる漢詩、漢文好きは私だけで、そんな私が代表世話人を担うことになったのもなにかのご縁かと開き直っています。

鑑賞会Bで漢詩の創作と輪講を楽しもう!!

漢詩鑑賞会B　高田宗治

鑑賞会Bは「漢詩の創作」と「輪講」の二本立制をとっておりますが、輪講の教材には「聯珠詩格」（大野修作校閲）を採用しております。現在「第三冊」に入っております。講師はこれまでと同じく住田笛雄先生と水城まゆみ先生にご指導をいただいております。

■漢詩の楽しみ方について

一　創作の魅力　漢詩には「創作する」楽しみと「鑑賞する」楽しみがありますが、最も関心の高いのが漢詩を「創作する」ことではないでしょうか。毎年実施している神漢連漢詩入門講座での参加者の意見によりますと、「漢詩を作ってみたい」という意見が圧倒的で、その他を上回っていることが分かりました。漢詩を愛好する者にとっては、「独自の漢詩を作ってみたい」という強い願望があるからではないでしょうか。

二　輪講の魅力　漢詩の鑑賞には接して知る楽しみと、自ら調べて識る楽しみがありますが、後者の楽しみ方に勝るものはないのではないでしょうか。輪講には自ら実践することによってしか得られない隠れた魅力があることが分かりました。聯珠詩格は別名「作詩法の書」とも呼ばれておりますが、漢詩を学ぶ者にとっては無くてはならない教材の一つではないかと思います。又漢詩の創作を実践的に学べるのも魅力の一つではないでしょうか。

自詠自書入門講座初めて開催（八月十三日・二十七日）

牛山知彦

先人や他人の漢詩はともかく、自詠の漢詩を筆で書くのは「漢詩人の嗜み」です。

詩人・文人の書は書家目線でいうところの上手い字である必要はなく、自作の漢詩の内容を訴える自分の味のある字でいいのではないかと思います。歌に例えれば、シンガーソングライターの歌う歌でいいわけです。

とはいっても、自分勝手に書けばいいというものではなく、漢詩作りにルールがあるように、書作にも一定の作法があります。

神漢連の漢詩入門講座に倣い、初めて自詠自書入門講座二日間コースを開催しました。書展出品経験者にはご遠慮頂き、若年サークル会員を中心に九名の参加がありました。

初日には、文房四宝などの道具と手入れの仕方、代用・省略可能な範囲、字典で字を調べることなどを説明。その後、書道用具店を訪問して、道具の相場を知って必要な道具を揃えました。二日目には、上手く見えるコツが書かれた「超簡単自詠自書の方法」に従って、実際に作品作り。皆さん熱心に取り組んで、会場は暫く静まり返っていました。なお、毎回懇親会を設けて交流を図りました。

参加者の希望により、今年の「自詠自書の会作品展」前にはもう一回日程を設けて、出品作品制作に取組む予定です。

会員のたより

「書と漢詩の出会い」

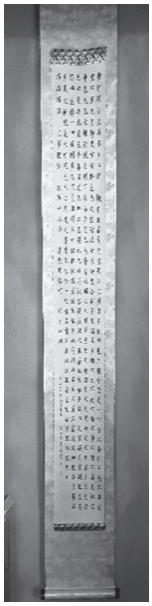
金星干支会　上田尤子（尤華）

私は若い頃から空海の「書」に興味がありかつて彼の書いた偶寺心経を作品にしたことがあります。その後、著名な高僧玄奘三蔵法師が、経典を求めてインドを旅した時に通ったシルクロードを旅することが出来ました。

私にとって広大な中国での体験が、その後の書道を学ぶ上で目を開かせてくれました。

帰国後、この貴重な体験を漢詩に書きとめ自由な書体で表現し、自詠自書としてまとめたいと思う様になりました。

さらに泉岳寺で座禅を体験したことで、写経をしている時と同じ様な無我の境地を味わい、より一層書と写経、漢詩への理解が深まった思いがしております。



坐禅有感　　坐禅に感有り

古寺寒梅閒放香　古寺の寒梅 間かに香を放つ
幽微燈下坐僧堂　幽微な灯下 僧堂に坐す
心猿意馬打肩響　心猿意馬 肩を打つ響
胸裏一條慈愛光　胸裏一条の慈愛の光

漢詩と私

三七八会　三浦哲郎

私が初めて漢詩と出会ったのは、高校時代の国語の授業でした（高校は大谷翔平の出身地の岩手県奥州市）。漢文の先生が李白杜甫の詩を熱っぽく朗読していたのが印象的でした。学生、会社勤め時代は時々吉川幸次郎の新唐詩選を読む程度でした。

本格的に漢詩に興味を持つようになったのは二〇〇七年に横浜岳風会で詩吟を始めてからです。二〇〇二年秋、妻が突然に脳出血で倒れ会社を辞めて在宅介護に専念、四年半の介護の甲斐なく妻は他界、その心の空白を埋めかつ健康のため詩吟を始めました。丁度その頃、神漢連の玉井先生が近所（横浜市栄区）で漢詩鑑賞会をお手作りのテキストで主催されていたので参加、鑑賞と作詩の手ほどきを受けました。その後神漢連に入会、初心者講座に参加して仲間十五名で古田、水城両先生を講師に三水会（現在合併して三七八会「ミナワカイ」）を結成、現在も勉強に励んでいます。又朝日カルチャーの窪寺漢詩創作教室に参加、十年間窪寺先生の厳しい批正で鍛えて頂きました。

昨年十月図らずも石川県小松市での全国漢詩祭典に入賞表彰されて大会に出席、良い思い出となりました。これも偏に良き恩師と詩友に恵まれた賜物と感謝しております。現在八十五歳ですが鶴骨霜髯、天命の続く限り精進して参ります。

「詩語という宝」

既望会　久保裕章

生来、厄介な蒐集癖に悩んで参りました。殊に近年は茶道にかまけ、訳の分からぬガラクタを集めて、家人に嘆息されている。

怪しい〝掘出し物〟を手に入れては懐を寒うし、博物館の名品を前に鼻息を荒げる内に、私はいつしか現代社会に全く興味のない散士気取りとなり果てていることに気づきました。そんな時、出会ったのが漢詩でした。

中でも私が心惹かれたのは〝詩語〟という宝の山でした。茶道では、利休が使った茶碗は私たち庶民には手にすることの叶わぬ存在です。しかし陶淵明が、杜甫が、蘇軾が使った詩語は、誰憚らず使っても構わないというのです。これらを手前勝手に並べ一人悦に入る遊びは、世事に拙く手元不如意に陥りがちな身を優しく慰めてくれるものでした。

しかし、ここに大きな落とし穴がありました。そのようにして作った詩は私の生活が全く関わらぬのです。逆に言えば、私の生の一場面の如きは、詩語のような立派な言葉に飾られるほどの代物ではなく、サラリーマン川柳程度の語彙で十分事足りるのであります。

美しい詩語には驚くほどの多層的な意味が眠っています。配置の仕方次第で、僅か数行の中で千歳の時を超え、神獣も目覚め舞い踊るでしょう。「この詩の力を以ってして何を詠めば良いのか」令和の凡夫には過ぎた宝を前に、今日も微躬を震わせて居ります。

漢詩と私

室橋幸子

◆日本鋼管で電話交換手だった二十代の頃、昼休み男性が大きな声で吟じていて初めて詩吟を知り書で書いていた詩をこうして吟じるのかと興味が湧きました。結婚退社してからは吟詠の先生に習うもすぐに漢詩を作ってご覧と広島の通信を紹介され少しは作り方をかじっていました。当時書で師の手伝いをし、生活が多忙で作詩は立ち消えに。

◆それから三十有余年矢張り漢詩創作が気になりカルチャーに入ったものの、改めて難しさを再認識しただけで又もや継続不能。それでもどこかに作詩の未練が残っていたのでしょう。忍耐力の無さに鞭打ち、これで駄目なら自分は駄目人間だ、と最後の挑戦と再びカルチャーに入り、神漢連にご縁を頂いたのもその頃です。二十代で大漢和を揃えてはいましたが作詩を学んで漸く必要性を感じ今迄を後悔しました。ある時、吟の勉強で漢詩の意味調べをしていた時、読み下しの表現が訳者によって違う事に気づき不思議でした。どうしてだろう、では本場中国ではどうなんだと疑問で中国語を習い始めました。中文は発音が難しくなかなか完璧にはできませんが、師はとても厳しい方でした。中国語の弁論大会にも出させて頂き東京まで遠征し、中国の方とも友達になり、マイペースで続けていました。

◆令和五年一月、突然大病をし、九死一生を得て、奇跡的に生き返りました。その後は達観し、永く続けてきた詩吟書の役職を総て捨てました。宝物の硯三十面位、筆墨、又着物三十着程生徒達に与え、欲を捨て身軽になりました。八十歳になり夫の看病が終わった時、自分の体がボロボロになっていました。一度死んだ命、生きているなら人の為になれる人間になりたい、コロナ禍でも一人も減らなかった会員達、四十年以上教室へ通ってくれた人間関係に感謝をし、先ず体を大事にする、展覧会に出品や、舞台に立ったりを諦めても、そうだ、漢詩作詩だけはできるかも、かつて漢詩大会で五回ほど賞を頂いた事を思い、死ぬまでに良い漢詩が作りたいと思うようになりました。思えば青春からずっと習い事人生でしたが、最後は、漢詩創作が、心の支えになってくれそうです

四季富士

春映百花清峻時
夏浮碧昊好雄姿
秋従紅樹麗佳足
冬帶雪装威自奇

春は百花を映ず清峻の時
夏は碧昊に浮かび雄姿好
秋は紅樹を従え麗佳足る
冬は雪装を帯び威自ら奇

静岡大会佳作

谿月流三十周年有感

創會傾心三十年　創会傾心三十年
風懷學得草堂邊　風懐学び得たり草堂の辺
高吟更伴龍蛇舞　高吟更に伴う龍蛇の舞
相励相携志愈堅　相励まし相携え志愈々堅し

平成元年に吟詠谿月流を立ち上げ毎年発表会を、平成三十年迄続きました。

「令和五年度 全国漢詩大会」で 神漢連会員活躍

第三十八回国民文化祭 石川百万石文化祭二〇二三 全国漢詩の祭典

石川県教育委員会教育長賞

三村公二

盧山懐古

突兀群峯春色回
香爐瀑布絶塵埃
昔時仙客逃名住
今日行人拾翠來

盧山懐古

突兀たる群峯 春色回り
香爐の瀑布 塵埃を絶つ
昔時 仙客 名を逃れて住み
今日 行人 翠を拾いて来たる

蘇軾の廬山の詩は、何故か、陶淵明、李白、白居易に比べるとあまり知られていない。何故だろうと地図と写真で四人の詩跡をたどっていると、四人の生き様が想像されて興味深かった。今ではすっかり観光地化してしまい、庵を設けて移り住む人などいない。廬山の姿は今も昔も変わらないのに、こんな較差がある。

丁度この頃、石川県漢詩連盟から漢詩大会の応募数が少なくて困っているとの連絡を受け、少しでも協力しなければと、この十年余は応募していなかったのに、常務理事は国民文化祭の時だけは応募できるという規約を思い出して、手元にあったこの詩を提出した。これが予期せぬ結果になったという事である。

全日本漢詩連盟会長賞

高橋純子

曉渡

霜風瑟瑟荻蘆洲
野渡無人曉色幽
獨立鸕鷀不飛去
煙霞横處護虚舟

曉渡

霜風 瑟々たる 荻蘆の洲
野渡 人無く 曉色幽なり
独り立つ鸕鷀 飛び去らず
煙霞 横たわる処 虚舟を護る

人間の背中が生き様を語ることはありますが、人間以外に背中で語るものに初めて出会いました。それも写真の中の一羽の鳥です。

数年前に漢詩の本で目にした一枚の写真。誰もいない渡し場の柱に立つ鳥。その後ろ姿に舟を護るという意志を感じたのです。ずっと忘れられず、私の心の中で生きていたあの鳥と景色を漢詩に詠んでみようと思いました。

主人公の鳥の孤独、責任を全うしようとする強さ、忍耐力など私が抱いた感情を吹き込んで詩語を組み立てていきました。

作品として反省点は多々あるのですが、図らずも賞をいただき、とても思い出深い詩となりました。

U18奨励賞最優秀賞

久保嶺夏

詠赫夜姫

深秋推戸桂花香
蟾影玲瓏滿屋梁
世上難分非我土
想看舊里正茫茫

赫夜姫を詠ず

深秋 戸を推せば 桂花香し
蟾影玲瓏 屋梁に満つ
世上分れ難くも 我が土に非ず
旧里を想い看て 正に茫々たり

秀作

廣田雅人

泉涌寺

月輪山麓帝陵甍
望拜遙懷曠代榮
廟畔清泉涌無盡
至今千載響淙琤

泉涌寺

月輪山麓 帝陵の甍
望拜 遥かに懐ふ 曠代の栄
廟畔の清泉 涌きて尽くる無く
至今 千載 響き淙琤たり

入選

岡嶋宣昭

春夜花堤

一痕朧月半空懸
滿目香雲正皎然
遊客傾樽櫻樹下
何人酣醉抱花眠

春夜の花堤

一痕 朧月 半空に懸り
満目の香雲 正に皎然たり
遊客樽を傾く 桜樹の下
何人 酣醉して花を抱きて眠る

小嶋明紀子

洛陽牡丹

魏紫馨香染短牋
姚黄麗色上長筵
誰人最愛此佳景
定是風流白樂天

洛陽の牡丹

魏紫の馨香 短牋を染め
姚黄の麗色 長筵に上る
誰人か最も愛す 此の佳景
定めて是れ 風流の白楽天

立春曉雨　五嶋美代子

庭角猶餘殘雪堆
一看歴日識春來
冷然曉雨打香骨
却使瓊葩到處開

立春曉雨

庭角猶お余す 残雪の堆
一たび暦日を看れば春の来たるを識る
冷然たる曉雨 香骨を打てども
却って瓊葩をして到る処に開か使む

春日　杉森千枝美

無頼東風連日吹
黄沙漠漠卷茅茨
春光又度書窗下
味讀高岑出塞詩

春日

無頼なる東風 連日吹き
黄沙 漠漠として 茅茨を巻く
春光又度る 書窗の下
味はひて読む 高岑の出塞の詩

茅廬歸燕　三浦哲郎

薫風習習麥秋天
閑坐繙書案几前
午聽呢喃梁上語
歸來雙燕不忘緣

茅廬帰燕

薫風 習習 麦秋の天
閑坐し書を繙く 案几の前
午ち聴く呢喃 梁上の語
帰来の双燕 縁を忘れず

第十五回諸橋轍次記念漢詩大会

最優秀賞・新潟県知事賞

秋日登樓　五嶋美代子

暮雲搖拽碧湖頭
荻岸蒼蒼一片秋
坐想謝公千古詠
聊乘逸興試登樓

秋日楼に登る

暮雲 揺拽す 碧湖の頭
荻岸 蒼蒼 一片の秋
坐して想ふ 謝公 千古の詠
聊か逸興に乗じて試みに楼に登る

昨年十月に泊まった浜名湖畔の印象から、この作品は生まれました。李白の秋登宣城謝朓北樓

江城如畫裏　山曉望晴空
兩水夾明鏡　雙橋落彩虹
人烟寒橘柚　秋色老梧桐
誰念北樓上　臨風懷謝公

を念頭においています。というと、とても漢詩に広い知識があるように思われそうですが、全くそうではありません。金星干支会、鑑賞会C、鑑賞会A、神辞会、横浜カルチャーセンター後藤教室で学んだことをそのまま詩にしているだけです。受賞はすべて皆様のおかげということです。皆様、感謝申し上げます。ありがとうございました。

秀作

三伏閒居　大谷明史

炎威赫赫絕行車
午睡夢醒孤啜茶
屋裏清香徐散處
坐看窗外紫薇花

三伏閒居

炎威 赫赫として行車を絶つ
午睡 夢 醒めて孤り茶を啜る
屋裏 清香 徐ろに散ずる処
坐して看る窓外 紫薇の花

佳作

秋宵坐月　小林迪雄

三更滿地爽風周
庭院蛩聲一片秋
獨坐書齋燈影淡
簷前白玉共良儔

秋宵 月に坐す

三更 満地 爽風 周し
庭院の蛩声 一片の秋
独り書斎に坐せば 灯影 淡し
簷前の白玉 良儔を共にす

聞蛙聲　柴本信子

萬蛙繁吹雨餘天
想起少時鄕苑邊
今却聽爲惆悵詠
同遊友已赴黃泉

蛙声を聞く

万蛙の繁吹 雨余の天
想ひ起こす 少時郷苑の辺
今は却って聴きて惆悵の詠と為す
同遊の友は已に黄泉に赴く

新霽田園　大野若人

耕人阡陌把鋤犁
花草含芳晴色齊
高響插秧歌濟濟
豐穰偏願蹈春泥

新霽の田園

耕人阡陌に鋤犁を把る
花草 芳を含みて 晴色 斉し
高く響く挿秧の歌 済済たり
豊穰偏へに願ひて春泥を踏む

送朋友歸國　木村　孝

柳塘小雨濕行衣
午下新晴促顧懷
今夕相交離別盞
明晨獨發大瀛涯

朋友の国に帰るを送る

柳塘の小雨 行衣を湿し
午下の新晴 顧懷を促す
今夕 相ひ交はす 離別の盞
明晨 独り発す 大瀛の涯

生誕記念の部

優秀賞

恭賀諸橋博士生誕百四十周年　小嶋明紀子

夙歳賢良修六經
扶桑興教思冥冥
闡明倉頡萬千字
人識鴻功照汗青

諸橋博士の生誕百四十周年を恭賀す

夙歳賢良六経を修む
扶桑 教を興して 思ひ 冥冥たり
闡明す 倉頡の万千の字
人は識る 鴻功の汗青を照らすを

佳作

訪諸橋轍次記念館　杉森千枝美

先生生地好秋光
遠近詩家會一堂
曲水泛杯如故事
臨流摘句是仙鄉

諸橋轍次記念館を訪ふ

先生の生地 好秋光
遠近の詩家 一堂に会す
曲水 杯を泛かぶること故事の如し
流れに臨みて句を摘む 是れ仙郷

第八回漱石漢詩記念大会

最優秀賞

獨遊熱海梅園　木村　孝

溪水潺潺一曲琴
花晨清冷步梅林
温湯暖氣亦如舊
抄贈君紅玉簪

独り熱海梅園に遊ぶ

溪水 潺々 一曲の琴
花晨 清冷 梅林を歩す
温湯の暖気 亦旧の如し
抄を折りて君に贈らむ紅玉の簪

結句七文字は昨年二月のオンライン吟行会「梅林春信」に投句したものです。これをベースに熱海梅園の朝を絶句に仕立ててみました。以前、二人で訪れたときのことを思い出しながら、今日は一人で来ているちょっぴり寂しい気分を詠んだものです。

普段のサークル勉強会では、先生から「取って付けたような結句だね。」などと指導をいただくことがままありますが、なるほど結句が決まれば意外にまとまるものかと納得した次第です。つきつめればオンライン吟行会でいただいた「簪」の一文字がスタートでした。

この度はたいそうな賞をいただき身に余る光栄です。これからもたゆまず精進して行きたいと思っております。

佳作

草原駿馬　五嶋美代子

霜蹄千里震川原
奮鬣追風群馬奔
秀骨稜稜肌似玉
天資應是及兒孫

草原駿馬

霜蹄千里 川原を震わす
鬣を奮い風を追って群馬奔る
秀骨稜々 肌玉に似たり
天資応に是れ児孫に及ぶべし

阿倍仲麻呂　久川憲四郎

征帆一片別東天
埋骨遼遼落日邊
清夜孤懷故山月
遊魂長恨不歸船

阿倍仲麻呂

征帆 一片 東天に別れ
骨を埋む 遼々 落日の辺
清夜孤り憶う 故山の月
遊魂長に恨む 不帰の船

紫陽花　小嶋明紀子

旬日憑欄細雨中
方知造化不言功
繡毬七變嫩葩色
幽賞深青與淺紅

紫陽花

旬日 欄に憑る 細雨の中
方に知る 造化 不言の功
繡毬 七たび変ず 嫩葩の色
幽賞す 深青と浅紅とを

入選

老耄無為　大谷明史

林下茅廬靜四圍
案頭一朶白薔薇
只思異國砲聲響
城市樓邊炸彈飛

老耄為す無し

林下の茅廬 四囲静かなり
案頭一朶 薔薇白し
只だ思う異国に砲声響き
城市楼辺 炸弾飛ぶを

疫病蔓延下病床有感　柴本信子

衰年病眼隱憂深
高閣幽房夜氣侵
夢裡潛彈想夫戀
無人聽取切歸心

疫病蔓延下病床感有り

衰年 眼を病みて 陰憂深し
高閣の幽房 夜気を侵す
夢裡潛かに弾ず 想夫恋
人の聴取する無く 帰心切なり

高壽奨励賞

讀漱石　永野　澄

高名萬里響如雷
詩趣盈盈文藻才
三四郎譚獨耽讀
青春懷古氣雄哉

漱石を読む

高名万里 響き雷の如し
詩趣盈々たり 文藻の才
三四郎譚独り耽読すれば
青春懷古して気雄なる哉

神奈川県漢詩連盟 令和六年の行事予定

カレンダーに予定を記入しましょう

●漢詩入門講座

期　日　①四月十日（水）　②四月十七日（水）　③四月二十四日（水）
　　④五月八日（水）　⑤五月二十二日（水）
時　間　午後一時三〇分～四時
講　師　香取和之会長ほか　連盟役員
場　所　神奈川近代文学館
問合せ・受講申込（連盟事務局）
〒221-0001　横浜市神奈川区西寺尾一―六―四
新井治仁　TEL/FAX 045-432-5438　Mail：haruhitoarai@hotmail.co.jp

漢詩の鑑賞と実作（全五回の講義と実習、第十八期生）
漢詩に関心のあるお友達に声をかけ、推薦して下さい。

●総会・講演会・懇親会

期　日　五月三十日（木）
時　間　午後一時～四時三〇分（総会・講演会）／五時～六時三〇分（懇親会）
場　所　神奈川近代文学館（総会・講演会）／ＫＫＲポートヒル横浜（懇親会）
総会議題　令和五年度事業報告、令和六年度活動計画、他
講演会　鷲野正明先生　演題未定。尚、講演会は会員以外も聴講可。
参加申込　総会・講演会は申込不要。懇親会出席の方は、四月初旬発送予定の開催案内に同封の振込用紙で振込み願います。

●吟行会

オンライン吟行会を二月二十六日（月）に開催予定。開催日が近づいた頃に、メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

編集後記

前号から編集委員に加わった田内隆と申します。宜しくお願いいたします。

今号は、全日本漢詩大会神奈川大会の記事を中心に、桜庭元事務局長の追悼、高芝麻子先生の講演会、今号からの新企画「サークル紹介」、「漢詩と私」等会員の皆様の記事、漢詩大会の入賞作品、等様々な記事を載せています。楽しんでお読み頂ければ幸いです。

さて、昨年の秋の講演会と同じ時期に、神奈川近代文学館で「井伏鱒二展」が開催されていました。ご覧になった方も多いと思いますが、展示を見ていて漢詩に関して気づいたことがありました。

一つ目は、井伏は、于武陵「勧酒」（サヨナラダケガ人生ダ）等の漢詩を独特のユーモア感覚で訳した「厄除け詩集」を書いています。二つ目は、井伏が師である佐藤春夫に、太宰治の病状を報告した手紙が新資料として出されていましたが、佐藤には女性の漢詩人を訳した「車塵集」があることです。三つ目は、井伏の友人として紹介されていた三好達治にも、吉川幸次郎と共著の「新唐詩選」があることです。三人の作家・詩人と漢詩との関わりを興味深く思いました。

さらに、この三人の作家・詩人は、最高のレベルで、神漢連のモットー「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を実践していて、彼らから学ぶのも面白いのではないか?と思った次第です。…いかがでしょうか?　（田内　隆）